

## カニピラフ

2022.10.18

昨日、部活動の生徒たちに喜多方でラーメンをごちそうしたことを書いた。すると、自分の経験も蘇ってきた。中学2年生の冬、12月の下旬だった。郡山で全日本レベルの大人の選手が出場する大会があった。それを見せるために、4人の生徒を顧問の先生が連れて行ってくださった。

試合を見た後の帰りである。本宮のとあるレストランに入った。4人の中学生は緊張した。カニピラフを食べた。生まれて初めての味である。この件については、以前、この紙面で紹介したことがある。

私にとっては、思い出のレストランである。今も健在である。その前を通るたびにカニピラフを思い出す。そのうち入ってみようかといつも思うのだが、結局、40年以上もの間、入れずにいる。おもしろいのは、この校長室だよりの読者の方が、二度も三度も、そのレストランを訪れてくださっていることである。やっぱり今度行ってみようと思う。

考えてみると、あの頃は、今のように外食をする場所など、そんなにはなかった。ラーメン屋さんも多くはなかった。外食というと限られていた。我が家は親が忙しかったせいもあるが、わざわざ外食に行くことなどなかった。あの頃は、町の食堂が主だったように思う。食べに行くよりも出前が多かったのかもしれない。

我が家にお客さんが来る。お昼時となる。すると、母親が近所のお寿司屋さんに電話をする。出前である。そこには私の分も含まれる。これがこの上ないご馳走だった。なぜか奇跡的に近くにお寿司屋さんがあった。

ご馳走といえば、あとはデパート最上階の食堂、レストランであろう。我が家は、ここにはあまり行かなかった。そのせいか思い出がない。我が家の場合は、バスターミナル近くのキッチンカローリーだった。そこのチキンライスが私のご馳走である。

これも我が家の場合だが、毎年のように山形県米沢市の隣の高島町にある亀岡文殊堂に行っていた。学問の神様である。文殊様、文殊様と言っていた。帰りには、決まって13号線沿いの食堂に立ち寄った。何のことはない。最初にその食堂に入ったので、その次からもずっと同じ食堂なのである。父も母も、いつも同じ食堂なのだが、うれしそうだった。

私はというと、いつも親子丼を注文していた。たまには違うものを食べればいいのに親子丼だった。これが中学3年生まで続いた。カニピラフとお寿司、チキンライスに親子丼であれば、中学生の私には、カニピラフが最上位にくる。結局、顧問の先生にご馳走していただいたカニピラフが一番なのである。今でもカニピラフには特別感がある。